

---

# 歩調

石子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歩調

### 【コード】

N0926F

### 【作者名】

石子

### 【あらすじ】

長年連れ添ってきた妻を、俺は殺すことにした。

壁掛け時計が、チツ、チツ、チツ……と音をたてるのがひどく耳障りだ。

そう思いながら、俺は寝ている妻の顔を上から覗き込む。見慣れた皺だらけの顔は、若い頃の面影などまったく残していない。

もちろん、俺だって歳をとった。数えるのも億劫だが、今年で八十五歳。妻は俺よりも二つ年上だったか……？

よく寝ている。

今のうちなら、そう苦しまないだろう。人の首を絞めて殺したことなんてないから、よくわからないが。

俺は、妻が起きないように気をつけながらそっと首に手をかけた。

「これっ！ これだけは譲れません。お願いですから買しましょう。きつと新しい家に似合いますよ！」

いつも控えめな妻がめずらしく強気でそう言った時の顔が、頭の中に一瞬浮かんだ。

もう随分、昔のことだ。そんな記憶が残っていたことに驚く。

みんなが貧しい暮らしをしている時代だった。結婚したものの、自分達だけで暮らしていけるほどの稼ぎもなくて俺の実家の片隅でひっそりと生活をしていた。

祖父母に、父母、兄弟姉妹に甥や姪まで十数人の大所帯。あの頃はそれが普通だった。

しかし、俺の母と馬が合わなかった妻は辛い思いをしていたようだ。文句を言うわけでもなく、黙々と日々を過ごしていたが、何年か経った頃に実家を出て自分達の家を持てることになった。

その頃の妻は楽しそうで、口数も多くなっていた気がする。

俺だつて、そんな彼女を見るのが嬉しくて、仕事の休みには新しい家具なんかを一緒に見に行ったものだ。

もちろん金銭的な余裕なんてものはないので、実家からもらえるものはもらい、家具も必要最小限のものを安い価格で何とかまかなう、という状態だったのだが。

そんな中で、妻がどうしても欲しがったのが時計だった。俺には何のこだわりもなかったが、妻はたまたま立ち寄った小さな時計屋に飾られていた壁掛け時計を一目見て随分と気に入ったようである。確かに、しっかりとした造りで、小ぶりの振り子が揺れ動く様はとても優雅にも見える。少し高かったのだが、妻に押し切られて購入した。

それが、今も壁にかかって時を刻み続けている。

「やっぱりいいですよ、この時計。うん。この家にしっくりきますよね」

はじめて時計をこの壁に掛けた時、妻はとても嬉しそうに俺にそう言った。俺は、そうだな、とか何の愛想もない答えを返したんだと思う。

今思えば、何十年も連れ添ってきたが、妻がなにか物をねだったのはそれが最初で最後だった。

節約しながら暮らして、徐々に家電製品なんかが増えていって……。まったく余裕なんてない生活だったが、それでも楽しかった。俺だけではなく、妻だつてきつと幸せだったはずだ。

何度かの修理は余儀なくされたが、この時計も一緒に歳をとってきた。

ボーン、ボーンという間延びしたような音で一時間毎に時刻を知らせてくれる。一時ならば一回、二時ならば二回、そして十二時には十二回音を鳴らす。

古いものなので、音量調節の機能なんてものはない。音を止めることもできないようだった。

正直、寝ている時にその音が鳴ると目が覚めてしまい困ることが

ある。若い頃は大きくして気にならなかったのだが、眠りが浅くなったのか、時計の音が鳴るたびに意識が覚醒するのだ。

それでもなんとなく、この掛け時計を外すのはためらわれてそのままにしてある。

少し前から、膝や腰が痛くなって歩くことがしんどい。

昔のように重いものを持ったりも徐々にできなくなっていく。

随分と力も弱くなってしまうたが、きつと体重を掛ければ、妻の細い首をしめて殺すことは可能だろう。

そう思って、少し手に力を加える。

この前見たニュースを頭の中で思い返した。

俺と同年代だった。たいして大きく取り上げられてはいなかったが、男が認知症の妻を殺して警察に自首したというものだ。その男と妻との間にどういう事情があったのかは分からない。ただ、ああ、俺と同じ立場の人間なんていくらでもいるんだろうなあ、と無感動に思った。

妻の様子が何かおかしいなと俺が気付いたのは、彼女の認知症がかなり進んでからだったらしい。

多分、俺は妻の一面しか見ていなかった。彼女がなにが好きで、どんなテレビを見ていて、どういう友達がいるのか何も知らない。

それでもいい、と思っていた。ただ二人で過ごす時間が楽しければそれでいいのだろうと思っていた。お互いに幸せだと思えた時が、確かにあった。

妻が、それで満足していたのかどうかは、結局分からずじまいだったな。

妻は、料理を作ろうとして油の代わりに洗剤を鍋にいれてぼや騒ぎを起こした。夜中にふらりと家を出て、近所の家の呼び鈴を押してまわった。

そんなことが続くとまわりからの目線も冷たくなっていく。妻が仲良くしていたらしい友人も何度か訪ねて来てくれたが、今では連絡先もわからない。もうこんな歳だし、相手も亡くなっているのかもしれないが、定かではない。

俺はもともと親しい友人なんていなかった。仕事を退職してしまえば、驚くほど人との繋がりがなくなつた。

認知症の妻の世話をせざるを得なくなつた俺には、正直そのほうが好都合だつた。知り合いから変に同情されるのは嫌だ。

子どももいない、多くいた親戚だつて疎遠になつている。

やつたこともない家事を自分でやるようになった。

最初こそどうしていいかわからず慣れない生活に、もう人生なんて終わったと思つたが、介護生活に慣れてくると、今までの中で妻との対話が一番多いのではないか、と思い始めた。

まあ、妻は俺のことを夫だと認識している時とそうでない時のムラがあり、会話も成立しないし、精神が不安定になつて奇声を発することも多かつたが。

ただ、こいつには俺しかいないのだと思うと妻の理不尽な行動も受け入れることができた。落ち着いているときには穏やかに昔のことを語り合つたりしたものだ。

俺はこの暮らしが、意外に気に入っている。

だからこそ、不安でたまらないのだ。

頼れる親類がいないのは、自分達を選んできた道だから仕方がない。八十を過ぎるくらいまではそんなことたいして気にならなかつた。

だが、歳をとれば体のあちこちにガタがくる。俺だつていつ動けなくなるかわからない。朝、起きることなくポックリ死んでしまつていることだつて考えられないことじゃない。

そうなれば、妻はどうやって生きていくのだろう。

いつも昼ごはんを済ませると妻は昼寝をする。

今がその時間だ。夜にはしばしば目を覚まして目的もなくあたりを歩いたりする彼女だが、なぜかこの昼寝の時間はぐっすり眠っていて、二時間くらいは起きないのだ。

今のうちだ。

しばらく前から決めていた。

俺が彼女の人生を終わらせてやるう。

首に回した手に力を込めた。

苦しいのか、少し妻の顔が歪んだ。

その時だった。

ポーン ポーン

音量の調節なんてできない、いつも精一杯の大きな音。

聞きなれた、……聞き慣れすぎた音に俺は思わず驚いて、首を締めようとしていた手を放してしまった。

顔を上げた俺は、壁掛け時計としばらく向かい合う。

奴は無機質に、ただいつも通り時を刻んでいるだけだった。

「たくさん二人の時間をつくっていきましょう。無理に急いだり、ゆっくりしすぎたりしないように。私はね、二人の足並みが揃ってなくなつていいと思うんですよ」

時計をここに掛けた時に、妻が言った。

「それでも、何か私達がおんなじ時を生きてるんだっていう、証拠みたいなものが欲しかったんです。……私とあなたの時を刻んでくれる時計。どうしてもお気に入り物の物が欲しかったんです」

満足そうな笑顔だった。

あれから数え切れなくらい迷惑をかけたし喧嘩もした。

この時計はそんな俺たちと共に時を過ごしてきたんだ。

この時計がまだがんばってるのに、俺が負けるわけにはいかないじゃないか。

急に、そう思った。

俺だって、まだまだ足腰が立たないわけじゃないし、そんなにすぐにくたばるわけにもいかない。まだしばらく、この生活を続けてみてもいいんじゃないだろうか。

また規則正しい寝息を立て始めた妻を見下ろす。

もう二時だ。

妻が起きる前に買い物を済ませないと。

俺は、晩御飯の献立を考えながら、買い物に出かけることにした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0926f/>

---

歩調

2010年10月8日15時20分発行